



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第43号

(2016年4・5月)



愈々、青葉の時節となって、自然はどこを見てもあざやかな色彩に描き出されている。初めて自然の美に眼を開いた人の驚異を象徴するかのような、新しい生命に漲っている緑りの色をもれる躑躅の濃厚な色彩は、激しく人の心を刺激して、もはや世界は、あわい空想の時代を通過したと云うことを示している、ききなれた鶯の声はいつの間にか去って、夜深くまで書斎にこもっていると、珍しくも時鳥が虚々と二声三声あげて郊外の空を何れへか消えて行く。此の時天地は只やるせない現実のなやみの深いことを切に想い起させる。

田部重治著『心の行方を追うて』より「五月」（詳細は6頁から）

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



2016年の春に

渡邊真知子

熊本県の地震では、多くの方々の命が失われました。心より冥福をお祈り申し上げます。そしてまだ地震の恐怖に耐えながら、切ない日々を過ごしている皆様に少しでも早く心が休まる日がくることを祈り、お見舞い申し上げます。

若葉が少しづつ葉色を変化させていくこの季節は、すべてを受け入れていけるような感じになれる不思議な魅力があります。淡い色がそんな風に感じさせるのでしょうか？

「薫陶」という言葉をご存知でしょうか？陶器を焼く前に、香をたいて、土に香を染み込ませる作業のことを言うそうです。やがて、香りが染みこむように、自然にその人の徳によって教えが身についていくことを「薫陶」というようになったそうです。老子の教えにもありますが、「無為にして化す」地域の皆さんの子ども達への関わりはこういうことを指しているんだろうなあと感じています。無理に教えこんだりせず自然に感化していくこと・・・こうして人は学び、五感を磨いてきたのだと思います。まさに、こうした阿部さんの活動こそが教育の理想形だと感じています。

私たちは目に見えるもの、音、香りの中で生きています。でも本当に大切なものは見えないもので、音にならない音で、作られた香りでない香りなのです。

そう考えると、自然が無為に教えてくれることを全身で感じられる阿部さんの活動は知らず知らずのうちに五感を育て、見えないものを慈しんでいけるようになるのだと感じています。

自然観察クラブと一緒に活動できることを嬉しく感じるとともに、益々のご活躍を祈念しています。ありがとうございました。
(北光クラブ会長)



新緑の夕日岳ハイキング
 ～鹿沼の最高地点（1526m）をめざして～

勝道の没後、彼の徳を慕ってその遺弟ならびに法統をついた僧徒たちによって、千有余年間に実施されたものに三峰五禅定というものがある。これについては後に述べるが、三峰五禅定の一つである冬峰行は、勝道が二荒山を開く以前に何回も修行をして歩いたところを行場として冬期に修行したものである。

勝道といえはすぐに冬峰行、冬峰行といえはすぐに勝道といわれるほどこの行と勝道は縁故が深い。しかも、この行法は二荒山頂を極める前に実施されたものであるから、ここでその大要を述べることにする。

時は宝亀10年から翌11年の春にかけ、わざわざ極寒の季節を選んで試みたものである。さきに、勝道等は出流山から大剣峰を経て山菅橋に出たが、この度は反対に山菅橋から大剣峰を経て出流山へと修行の方向を変えた。前のを順の峰とすれば後ののは逆の峰である。そして三の宿、薬師岳、夕日岳、地藏岳などの高峰には登らず、直に山菅橋から鉢石宿を過ぎ、小太郎坂を経て山久保、小来川、草久、八岡、古越路を通して古峰原に出ることにした。この道は四本龍寺に居る間に、たびたび、勝道の徒弟たちが巡錫して、土着の住民に加持祈禱を行っていたので親しみのある地域であった。それ故、冬峰行の根拠地すなわち大宿と称するものは、もともと、四本龍寺であったが、何時の世にか大宿が古峰原に移った。それ程古峰原は冬峰行の中心地になったのである。

（星野理一郎著『勝道上人』（昭和29年12月・勝道上人発行事務所）より）

日本に朝日岳、朝日山の山名は多いが夕日岳と名の付く山は少ない。想像するに、夕日の当たる山の姿を見て付けた名前であろう。地藏岳、薬師岳、と同じように仏教に関する名前か、と調べてみても奈良県に夕日地藏があるのみで「夕日」には仏教的な意味はないようだ。それでは、夕日の当たる夕日岳を見るにふさわしい場所があるだろうか。

鹿沼の市街地の高台に立てば男体山の左に小さく奥白根山が見え、その左に薬師岳、平らな尾根が長く続いて夕日岳、地藏岳を認めることができる。それにしてもあまりにも小さく、また方向からして夕日の当たる姿を見るには条件が悪すぎる。山の麓から夕日岳を見上げることでできる場所も、周りが低山帯

であることから少なく、わずかに一の鳥居付近から望むことができるのみであろうか。

足尾側から見る夕日岳について、知識はないが、夕日岳は薬師岳と地藏岳をつなぐ尾根から鹿沼側に入った所にあり、立派にそびえる姿を期待することはできない。それよりもむしろ、夕日岳の名は周辺の山上、薬師岳や半月山あたりから望んで夕日の当たる山容を見て付けられた名前ではないだろうか。夕日岳、と名付けるとき、夕日の当たる雄大な山を想像するからである。

この山域は出流山満願寺から大剣峰（横根山）を経て中禅寺（立木観音）に至る山岳修験道の行者道である。その足跡は、地藏岳、薬師岳、行者岳、などの山名に残っており、夕日岳もまたそれらの山名と同じように、この山域を歩き交う僧侶たちによって名付けられたと考えるのが自然である。当然、勝道上人が名付けた可能性を否定することもできない。

今回は古峯神社に車を置いて夕日岳山頂（1526m）を目指します。標高差は800mほどです。クリンソウの開花の季節です。

日 時：6月5日（日）AM6:00 北小西門集合

行 程：鹿沼北小——古峯神社……登山道入口……林道終点……ハガタテ
……地藏岳……三ツ目……夕日岳……地藏岳……林道終点……
古峯神社——鹿沼北小

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴、長袖・長ズボン

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、参考書（とちぎの社寺散歩）、

1/25,000 地形図は「古峯原」「日光南部」

参加費：おとな500円、子ども250円（ガソリン代等）

今年度保険料（4～3月、1年間有効）として

子ども800円、おとな1,850円（65歳以上1,200円）

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



日光・中禅寺湖南岸、巨樹探訪の会

「延暦三年四月上人二荒の山腹湖北の地に立木観音を手刻し寺を創して中禅寺と称す又堂の側かたわらに一祠やしるを設け山神を崇めて鎮守とし中禅寺大権現と称す」

日光山沿革略記(明治38年5月13日・輪王寺寺務所発行)より

中宮祠に車を置いてバスで赤沼茶屋へ。ここで低公害バスに乗り換えて、千手ガ浜を訪ねます。中禅寺湖御南岸をたどって中禅寺立木観音を目指しましょう。時間があれば立木観音に参詣します。千手ガ原ではクリンソウが水辺で花を咲かせているでしょう。南岸は比較的人通りが少なく、原生林が残されています。山々は新緑に彩られ、最も美しい季節です。

日 時：6月12日(日) AM5:00 北小西門集合または
AM6:30 日光自然博物館集合

行 程：鹿沼(北小) 5:10——土沢IC——清滝IC——ファミリ-マ-ト 5:50——
中宮祠(日光自然博物館) 6:30——(バス)——赤沼(バス)——
千手ガ浜……千手堂跡……梵字岩……白岩……松ガ崎……大日崎
……阿世湯……狸窪……中禅寺立木観音……中宮祠

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴、長袖・長ズボン

持ち物：熊鈴、リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、
お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LEDランプ、ストック、

参考書(栃木の山 150、栃木県の歴史散歩)、

1/25,000 地形図は「中禅寺湖」

参加費：おとな 700 円、子ども 350 円(ガソリン代等)

今年度保険料(4~3月、1年間有効)として

子ども 800 円、おとな 1,850 円(65歳以上 1,200 円)

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774(阿部)



田部重治著『心の行方を追うて』

(昭和8年8月5日・第一書房発行)

人 生

私達は何の為に生きなければならないのか、私達は果して生きる必要があるのかと云うことが、屢々、現代人の口に上ることがある。凡てを問題として考えなければならぬ心持を感じずる時代、凡てを懐疑的に見ようとする時代にあっては、そう云う質問の生ずるのも、蓋し当然のことであろう。

少なくとも私達は、個人的意識の上からは、何の目的をもって生れたと云うわけではなく、また、私達に生命を与えた父母も私達に特別の使命を授けんと企てたわけでもない。慥かに私達は何と云うことなしに生れて来、父母や兄妹の間に人となり、世間に出て、一層、人間社会を雑沓せしめ、或る意味に於ては世界を、一層、生活困難に陥らしめている。そう云う意味に於て私達は盲目的に此の世に顕われたと言って差支ないかも知れない。

斯う云う際に神が私達に何等かの使命を果さしめんが為めに私達を此の世に送ったと云う風な解釈によって、生存の意義を説こうとするのは、余りにも形而上的な考察であり、現代とは相容れないものであろう。

ただ、最も明かなことは、宇宙は生けるものであり、人類は如何にして生じたか分らないが、少なくとも生ける宇宙の一分派として存在しているものであり、其れは如何に絶滅せしめようとしても消滅しがたい一つの現象として、而も厳然たる事実として存在していると云うことである。其れは如何にしても拒否することの出来ない事実である。従って私達の一部分が其の存在を否定し、自からの生を拒否するとしても、人類は依然として存続し、人類としての本能を、其の理性を、其の衝動を飽くまで遂行せずば止むところがない。

宇宙を生けるものであると承認する以上、人類を其の一分派として認める以上、従って、また、人類が飽くまで存続することを認める以上、私達も人間として生活することをも、亦、当然のこととして認めなければならない。私達は何等の目的を意識することなく生れて来たとしても、又、私達を産んだ人間に何等の目的が意識されなかったとしても、いやくも私達が自からの存在の必然性を認める以上は、私達の生れて来る其



の事が宇宙的運動の理法の必然性によるものであり、そして此の必然性が実感されて見れば、私達は自からの生活の充実を憧憬するに至ることも当然の帰結であると認めなければならない。

個人として私達は自殺を欲することもある。私達の生の不甲斐なさをつくづく果敢なんで、人生の空虚を叫ぶこともありうる。又稀な場合として自殺を是認しなければならないこともある。しかし私達は人類全体の絶滅を希うことは出来ない。何となれば、人類全体の絶滅は果し得るとしても、何かの形に於て人類と同様のもの、或はそれ以下のものが、人類に代って生ずることが考えられなければならないから。そしてそう云うものをも悉く否定するとすれば、其れは宇宙其の物の生けることを否定し、宇宙其の物の運動の中止をすらも希わねばならぬことになる。畢竟、私達に取っての問題は、如何に現実の生活をよりよくすることが出来るかと云うことでしかあり得られない。人類の生存が必然的あり、そして私達に取っての問題は上述の如きものであるとして見れば、私達の意識しない理想として私達は何物かを抱いて此の世界に生れたと云うことを考うに至ることも無理ではあるまい。

或る意味に於て、私達に生を与えた父母には私達が生れなければならない力が無意識に働いたと云えるであろう。また、父母が私達に生を与えたと云うことは、宇宙的生命の働きが、更に一分派を形作り、私達の父母を通じて流出したとも云えるであろう。何れにしても私達は生ずべくして生じたと云う風に解釈しても差支ないことだけは慥かである。

斯くの如く、生きるのが私達にいやでも応でも与えられた運命であり、そして生きる上には何等かの理想を抱かなければならぬとすれば、私達は自分にとって最もふさわしい、自分の生命を打込みたいと思うものを取って、それによって進むより外に仕様がなない。そうする上には、時としては何が自分にとってふさわしいか分らないことがあり、又、それが分るとしても必ずしも携わっている仕事と目的とが一致しない悩みを経験することが多い。そう云う場合に必要なことは、私達の仕事は人生に於て如何なる意味をもっているか、私達の平凡と想われる仕事も、此の世に於て如何に多大の意義をもっているかを考え、それを勇敢につかむことである。それでも個人として抱いている目的の要求が、現在の仕事を続けることを不可能にするほどに力強いものであるならば、私達はそれに転心することも止むを得ないことであり、それほど力強いものであるならば、其の事に成功することも必ずしも難かしいことではなからう。

いずれにしても私達は生活に於けるロマンティストであることを避けなければならない。ここに云うロマンティストの意味は、ただはかない希望を抱くのみで、それを実現

(次ページへ続く)

することに努力しない人間を云うのである。希望を抱いて而もロマンティストであることを免れうる場合は、それを実現しようとする努力が伴う時に限られる。私達は刹那刹那をして其れ自身を完成せしめ、希望を残すことを考えてはならない。

私はダンテが爽やかなる空気であって、執拗くも悲しみながら人生を送った人間を地獄に置いている『神曲』の或る節を思い起す。人生は悲哀であるかも知れない。しかし甘んじて悲哀に止まって居る心状ほど憐れむべきものはない。一たび私達は現実の世界に於ては一つの刹那も取返すことの出来ない尊いものであることを痛感すれば、何等の努力なき、じめじめとした悲哀を捨てて、新しい自己を生成し、築くことに努力しなければならないことを思う。

次のような考えは現代人に取って可なり力強いものである。即ち「私達の生命は普遍的な意義をもっているにしても、私達は初めから別々の時間、空間を支配していると云うことに個人として独特のものをもっている。そして其の上に私達は境遇によって個差を形作るようになる。此の事はやがては人間を不平等にせずんば止まない。それがややもすれば、私達をして一種の運命的な考を抱かしめ、人間はどうしても善い或は悪い境遇をのがれることが出来ない、飽くまで其れによって縛られるのみならず、私達の個性すらも其れによって形作られると云う思想をすら抱かしめる」と。それには慥かに一理がある。恐らくはそうしたものは、人類の存続する限りががれられないであろう。たとい人間の経済的状態がすっかり改善され、人間が経済的に幸福になっても、そうした意味の平等は決して得られることがない。人間は同じ型に入れられて鑄造された物質でない限り、到底、其れは達し得べからざることと見なければならぬ。

しかし一たび私達は人生の意義に目覚めた以上は、どこまでも現状の儘であることは出来ない。少なくとも人類の歴史を見れば人類は決して無為に自然のままに今日まで進んで来たとは考えられない。文化が今日の状態になるまでには多少の弊害は伴ったにしても、決して手を拱いて達したのではない。そして歴史は決して文化は境遇に恵まれたもののみによって促進されたことを示してはいない。努力のみが私達を救うものであり、努力のみが私達の現状を止揚し自からの境遇を改造するものであることが考えられる。

そして一方に於て人間が別々に生れて来なければならぬことの既に含んでいる差別、更に境遇によって作られる個差なるものは、私達人類が一体として生れて来ない限り、永久に除くことの出来ないものである。そうしたものは、人生をして複雑ならしめ、矛盾に充たさしめると共に、人間の協調、平和、愛の必要を感じしめる。そして、又、私達をして闘争、不平、憎厭を感じしめる。人間のもっている喜び、怒り、憐れ

(次ページへ続く)

み、楽しみの情は絶えず、そこから発展して来る。一体としての人類にはそうした人間的な感情の存しよう筈がない。

そして是等の人間的な行為、感情は、人間に最も根本的な深いところから来ているものであって、是等をなくすることは、時には人間自身の廃棄をすら意味すると云う厄介なことになる。どちらへ向いても人間は矛盾に充ちた動物である。否、個人個人として生きると云うこと其の事に矛盾が始まる。人間以外の動物も其れを遁れることは出来ない。是等の矛盾は経済問題の解決によっても遁れることが出来ない。寧ろ人間に取って本質的である。故にそう云うところから来る悲劇は、永遠に消滅することがないのみか、或る意味に於ては、人生は悲劇其の物である。そして此の矛盾から来る悲劇によって文化は進み、悲劇は次の刹那に於て一時期の平和的な総合を生み出すけれども、又もや新しい悲劇を次の瞬間に作り出す。

しかし一方から云えば、斯うした事実を絶対に遁れることが出来ないとしても、其等の矛盾、悲劇を意識して人世に処する人間の態度とそうでない人間の其れとの間には大きな相違がある。私達は少なくとも、かかる問題を厳然たる事実の問題として認めると共に、個人のはたらきが単に個人に取ってのみならず、凡ての人間に取って普遍的意義をもつ場合と考へて、利己的な意義をより少なくすることと目論むことが出来る。又、愛の反面の憎みの場合を考へても、其れを真の価値ある憎みとならしめることの出来る場合を考へることも決して不可能ではないと思う。つまり私達は個人的な存在ではあるが、一方には普遍的な人間性に目覚め、其れを宗教的な信念として高め、それにより統一されることにより、私達の行為に意義と統制とを与うことが出来、又、此の信念により却って大きな憎みの行為に出ずることもありうる。此の考は他の場合にも適用されうる。そして私達は自己の個性を存分に發揮しうる場合の益々多いことを考へる。

其の結果として私達はやがて、益々、此の普遍的な人間性に深まり、遂には宗教的な普遍的な情操に至って究極する。そして斯くの如き状態が、恐らくは次の時代の人々によっても繰返され、そこから、一層、高い体験が生み出され、一層、優秀な文化の様態が産出されるであろうことを期待しなければならない。人生の矛盾の統一は、斯くの如き意識と、人間的普遍性の目覚めによる統制とにのみ、多少の希望を見出すことが出来る。

(昭3・4)

三 月

春は還って来た。春の先触れである梅の花は散って、眠れる自然は、愈々、これ

(次ページへ続く)

からあわただしげに覚めようとして、人間にも絶えず新しいものを創造せんことを暗示する。私は之から何物かを築き上げなければならない。そして慥かに私の心は萌え出さず何物かを感じつつある。私は只、現在に生きんとする心願にのみ動かかなければならない。(以下略)

四 月

自然の明るみは著しく増して来た。桜の花は開きかけると共に、柳が若々しく芽生して、軟風にしなだれて居る。街道をあるく人の数は道端に頭を擡げる若草と共に増して、彼等の顔は花と共に光って来る。彼等は快樂其の物にすらも一の因襲を求めて、昔から享樂すべく与えられた一定の花に対してのみ特に享樂の眼を開き、此の時を逸すれば、人生の享樂の何物も存していないかのように感ずる、そして自己を放浪せしめる有難き口実にありついたことを深く感謝している。(以下略)

五 月

愈々、青葉の時節となって、自然はどこを見てもあざやかな色彩に描き出されている。初めて自然の美に眼を開いた人の驚異を象徴するかのような、新しい生命に漲っている緑りの色をもれる躑躅の濃厚な色彩は、激しく人の心を刺激して、もはや世界は、あわい空想の時代を通過したと云うことを示している、ききなれた鶯の声はいつの間にか去って、夜深くまで書齋にこもっていると、珍しくも時鳥が虚々々と二声三声あげて郊外の空を何れへか消えて行く。此の時天地は只やるせない現実のなやみの深いことを切に想い起させる。(以下略)

六 月

私は、今、寂しい北国の町の長い杉垣に沿うて、葬式の見送りがすんだあとで、しずしずと降る雨の中を、傘かたげながら、ただ独り辿っていた自らの悲しい心持を想い起す。

昨日まで親しく呼んで居た懐しき人の名は、今日は想いもよらぬ法名となって、其の声は永遠に聞えることのない彼方に消えて仕舞った。未だ二十にも充たぬ若い心をもって此の世を去らなければならなかった彼女の深い悲しみは思いやっても氣息がつかまるような気がする。生れ付き物言うことも稀に、容儀の上に深い女性的な愛の力を閃めかして居た彼女は、秋の夕べのように寂しく行って仕舞ったのである。生ける美しい姿にあらわれる音楽的な象徴的な一挙一動は、何と神秘的なものであろう。そして、それがまた寂しくあわただしく宛ら美しいほほえみのように消えて行くことの何と深く神秘的なものであろう。(以下略)



田部重治の深い溪谷へ

田部重治の作品の世界に入ることは、あたかも奥秩父の深い谷を探検するようなものである。枝沢に入るたびに新たなる発見がある。そして本谷に戻ってみると、そこにまた前には気付かなかった新たなる発見がある。しかし、谷全体を見渡せる場所はどこにもない。田部重治の著作の世界は複雑で深い。田部重治の豊かな作品群の根底には、理性と知性、そして豊かな教養に基づいた様々な経験があると思う。その上に現われた多様で満ちあふれるばかりの豊かな作品群は我々山旅愛好家にとって、未知なる世界への探検欲をそそるものである。田部重治が単なる山岳紀行作家でないことは、哲学書の存在から首肯されるであろう。田部の山旅は哲学とともにある。繊細な知性の上にある思索の旅である。

私は田部重治にならって、一人山旅に出掛けたいと思う。特に思索にふけるわけではなく、ただ静かなる山に、限りなく古木の立ち並ぶ森に、包まれていたいと思う。特に私は、友と共に山旅に出掛けたいと思う。特に語り合うわけでもなく、新緑の山を、美しい谷を共にさまよい歩きたいと思う。

本編では哲学書と分類されるべき著書を取り上げてみた。読者はすでに田部重治の著書が、研究の対象とすべき、高邁なる作品群であることにお気付きのことと思う。

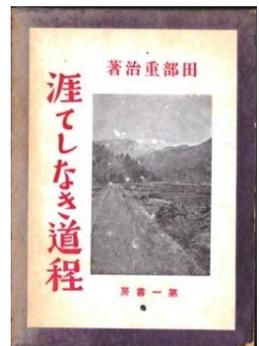
ここで田部重治研究会の会報「鶴のやうに」創刊号の表紙を飾った、白坂正治氏による巻頭言を紹介いたします。
(阿部良司)



『心の行方を追うて』
白玉書房版
昭和24年7月18日



『混沌より統一へ』
博文館
大正9年5月5日



『涯てしなき道程』
第一書房
昭和11年11月10日

「鶴のやうに 1号」巻頭言

白坂 正治

私が田部重治の作品を初めて読んだのは中学1年、12歳の夏休みのことだった。「山と溪谷」（第一書房）。旧仮名遣い、難解な漢字にとまどいつつ、辞典を引きながら宿題そっちのけで貪るように休みの大半を読み明かしたのを覚えている。何せ決して神童ではない12歳の少年のこと、「読んだ」のではなく自分の祖父よりさらに20歳も年上で、小生5歳の時には既に土に還られた田部翁が慈しみの情をもって「詠まれ読ませて」下さったのに違いない。15年ほど前の夏「小田急古書の街」の会場で掲載料一人300円で探求書をまとめて小冊子にする「マイ本レーダー」なる企画があり、私も田部重治の著作ばかり10冊近くを書き載せてもらった。それを見て葉書を下された方が石黒良二さんである。二人で「田部重治先生の足跡を辿る山の会」（J・T・M・C）を結成、以来田部先生の辿りし山路を「平成の田部、小暮コンビ」と勝手に自分達で名付けて歩いてもいる。田部重治の世界にわけいってからはや20年以上、そろそろ井の中の蛙の研究の真似ごとから脱皮して「還元」といっては僭越であるが、少なくともそういう心持でやっていく必要性、責任を石黒さんとの度々の会話の中でも強く感じ、田部重治没後30年にあたる命日9月22日に“田部重治研究会”を発足させ、会報「鶴のやうに」を発刊するに至ったのである。多くの方の御賛同が得られることを願ってやまない。

（田部重治研究会・2002年9月22日発行）



『萌え出づる心』
第一書房
昭和14年8月20日



『山茶花の咲く頃』
鳳文書林
昭和23年6月10日



『旅・人間・自然』
東京ライフ社
昭和32年2月20日

《資料》 田部重治の著作についてふれた書物（青字は田部作品名）

- 深田久弥「山さまざま」(1959年6月20日 五月書房) 『日本アルプスと秩父巡礼』
- 深田久彌「山岳遍歴」(1967年9月30日 番町書房) わが山旅五十年』の田部さん
- 安川茂雄「近代日本登山史」(1969年6月30日 あかね書房) 『わが山旅五十年』
- 山崎安治「日本登山史」(1969年6月13日 白水社) 『日本アルプスと秩父巡礼』
『山と溪谷』
- 藤島敏男「山に忘れたパイプ」(1970年5月 茗溪堂) 『スキーの山旅』
- 日本山岳会「覆刻 日本の山岳名著 解題」(1975年10月14日 大修館書店)
(横山厚夫) 『日本アルプスと秩父巡礼』
- 高橋啓介「山の限定本」(1981年6月15日 湯川書房) 『わが山旅五十年』
- 水野 勉「登山家素描」(1983年7月19日 鹿鳴荘) 『日本アルプスと秩父巡礼』
『山と溪谷』
- 近藤信行「日本の山の名著・総解説」(1985年2月25日 自由国民社)
『日本アルプスと秩父巡礼』
『わが山旅五十年』
- 三木 清「三木 清全集・第17巻」(1988年2月17日 岩波書店)
『中世欧州文学史』
- 斎藤一男「山をよむ」(1993年5月22日 アテネ書房) 『日本アルプスと秩父巡礼』
『わが山旅五十年』
- 大森久雄「本のある山旅」(1996年11月1日 山と溪谷社) 『山と溪谷』
- 横山厚夫「山書の森へ」(1997年3月1日 山と溪谷社) 『日本アルプスと秩父巡礼』
『峠と高原』
- 福島功夫「山の名著30選」(1998年11月26日 東京新聞出版局)
『日本アルプスと秩父巡礼』
- 横山厚夫「山麓亭百話(中)」(2000年7月20日 白山書房)
(雲取山の、もう一つの記念碑) 『わが山旅五十年』
- 河村正之「山書散策」(2001年3月23日 東京新聞出版局) 『山と溪谷』
- 遠藤宇甲太「登山史の森へ」(2002年6月17日 平凡社) 『山と溪谷』
- 近藤信行「山の名著 明治・大正・昭和戦前編」(2009年11月10日 自由国民社)
(知の系譜シリーズ) 『日本アルプスと秩父巡礼』
『わが山旅五十年』

早春の三轟山ハイキング 3月13日(日) 天気・はれ

国道 293 号線を足利方面に進み、田沼で唐沢山のトンネルを抜けて、村檜神社に詣でました。スギやモミの古木の多い社叢は市の天然記念物。その社叢に包まれた本殿は室町時代の建築様式をよくのこし、屋根は県内唯一現存する檜皮葺ひわだぶき。ヒノキの樹皮を用いて施工する屋根葺手法の一つで、日本古来の伝統的手法です。国内の多くの文化財の屋根で檜皮葺を見ることができます。この村檜神社社殿も、左右に流れる屋根の曲線、その裾に広がる複雑な造りの屋根も曲線が目立ちます。その美しさこそ室町時代の建築様式、あるいは檜皮葺の特徴なのでしょう。文化財に指定される所以でしょう。

かたくりの里ではすでにカタクリの葉が広がって今にも開花しそう。この日も山中で多くのハイカーに出会いましたが、お彼岸にはさらに多くの花見客で賑わうことでしょう。三轟山(青竜ガ岳)、中岳、奥社を越えて三轟神社に降り東麓をたどって慈覚大師誕生の地を訪ね、カタクリの里に戻って帰路につきました。



三轟山山頂にて

※ 参加者

佐々木伸二、石崎隆史・裕子、阿部良司(計4名)

※ 見た植物

(針葉樹) アカマツ、スギ、ヒノキ、モミ、(常緑樹) イヌツゲ、シラカシ、ヤブコウジ、

(常緑つる植物) キツタ、ツルグミ、テイカカズラ、

(落葉樹) アオハダ、アカシデ、アカメガシワ、ウリハダカエデ、クヌギ、コウヤボウキ、コゴメウツギ、コナラ、スイカズラ、ネジキ、ホオノキ、リュウブ、

(木の花) ウグイスカグラ、ウメ(植)、

カワツザクラ(植)、サンシュユ(植)、

ヒサカキ、ヤブツバキ、ヤマツツジ、

(草の花) アズマイチゲ、

オオイヌノフグリ、カタクリ(蕾)、



遠くから見た三轟山

シュンラン、ナノハナ、ネコノメソウ、ノボロギク、フキ、フクジュソウ（植）、
ホトケノザ、ミズバショウ（植）、（草の葉）ノキシノブ、ヒガンバナ、ヤブラン

※ 見た・聞こえた鳥

ウグイス、エナガ、カケス、コゲラ、ヒガラ、ホオジロ（さえぎり）

※ 三轟山写真集



モミの大木



スギの大木



村檜神社、檜皮葺の屋根

ミズバショウ



カタクリ（まだ蕾）



アズマイチゲ



ウグイスカグラ



ヤマツツジ



シュンラン



ヒサカキ



サンシュユ



東京・小下沢より景信山・高尾山

～早春の草花の観察～

4月3日（日） 天気・くもり

恒例となった春の東京山行、天気に恵まれないのが常で、今年も厚い雲の下ながら幸い雨に降られることなく、計画の行程をこなしました。折しも桜前線通過の真っ只中で、栃木から東京まで電車で南下しながら車窓で花見を堪能。さすがに奥山はまだちらほらですが、登り始めの小下沢周辺では足元のさまざまな野山の花を楽しむことができました。しかしこの「道草」は意外に時間がかかり、茶店もある景信山頂で昼食にありついたのは昼過ぎ、尾根道伝いに小仏城山を経て高尾山頂に至ったのは夕方、下りのケーブルカーは最終便までまだ少し余裕ありでしたが。

東京からの参加者が合流して総勢 10 名、久々に賑やかな山行でしたが、先を急いで山頂を極めたい人、途中の自然を楽しみたい人、それをまとめるのは大変です。かつての城山～高尾間の泥んこ尾根道は整備されて歩きやすい階段になっていたものの、延々と続く登り階段もなかなかしんどいものでした。



夕方になってやっと
高尾山頂に到着

※ 参加者

佐々木伸二、阿部瑞穂、野田 亨、石崎理絵・村井浩平、石崎隆史・裕子、石束ゆみ、阿部良司・みゆき（計 10 名）

※ 見た植物

（常緑つる植物）キジョラン、

（草の花）エイザンスミレ、エンゴサク、オウギカズラ、

シュンラン（右写真）、シロバナノスミレサイシン、ツルカノコソウ、トウゴクサバノオ、

ニリンソウ、ハナネコノメ、ヒカゲスミレ、ヒトリシズカ、ヒメオドリコソウ、

ミヤマキケマン、ヤマネコノメソウ、ヤマルリソウ、ヨゴレコノメ、ラショウモンカズラ

（木の花）アセビ、カンヒザクラ、キブシ、クロモジ、コブシ、マメザクラ、ミツバツツジ、



ミツマタ、ミヤマシキミ、モミジイチゴ、ヤマブキ

※ 見た鳥・動物

アオサギ、アズマヒキガエル (右参照)



※ 高尾山植物図鑑



ヒメオドリコソウ



ムラサキケマン



ミヤマキケマン



トウゴクサバノオ



エイザンスミレ



シロバナノスマイレサイシン



ヒカゲスミレ



ニリンソウ



ラショウモンカズラ



ミヤマカタバミ



ヤマルリソウ



ヒトリシズカ



ハナネコノメ



ヤマネコノメソウ



ヨゴレネコノメ



ツルカノコソウ



キブシ



アブラチャン



マメザクラ



コブシ



クロモジ



ミツバツツジ



アセビ



カンヒザクラ

※ 参加者からいただいたおたより

景信・高尾登山記

日光市立東中学校 佐々木伸二

寝坊して急いできっぷを買って日光線の始発に飛び乗って日光を5時7分に出発。家から駅まで約2km。20分前に起きてよく間に合ったものだ。朝ご飯は後にするか…。

今日登るコースは大下というバス停から小下沢という沢に沿った林道を上がり、その後横へそれて景信山へ。そして小仏峠、小仏城山を経て高尾山、ケーブルカーの駅をめざすルート。はたしてうまくいだろうか…。というのも去年行った陣馬山、そして奥多摩は予定コースの半分も行かず終わったからだ。陣馬山は登山口から陣馬、景信をへて今回と同じルートのはずだった。陣馬へ行ったのはよかったがすでに1時半近く。けっきょくその先の底沢峠から陣馬高原下のバス停へ下った。奥多摩などさんたんたるもので、目標の六ツ石山どころか手前の三ノ木戸山^{さぬきど}へも行けず尾根の途中の林の中で引き返した。今回は小仏峠を出ると逃げ場がない。心配である。

鹿沼5時32分着。阿部さん、石崎さんたち計5人と列車内で落ち合う。この後東京方面で4人が加わって総勢10人のグループとなる予定だ。

宇都宮で湘南新宿ライン大船行きに乗り換え、新宿へ向かう。クロスシートに座った。

途中小金井で列車にあと5両つなぐそう。鉄道マニアの僕としてははずせない。今いるのは前から2両目。後ろ8両を歩いて行って連結の見学。その後ホームをダッシュ。いい運動になった。都会の列車は長いなあ。…あれ？ここまだ栃木県だよな？

その後は延々と約2時間。新宿到着の直前、阿部隊長が唐突に「あっ、あの丸っこいビルなんだあ!？」とさわぎだす。向かいの人が笑っている。オノボリさん丸出し。やれやれ。し

(次ページへ続く)

かし何年前かに池袋のスクランブル交差点に行ったとき僕もひとこと。「…これぶつからないよね？」

さて新宿では20分以上の時間がありその後乗ったのがホリデー快速富士山1号、河口湖行き。以前は小山始発の3号があったけれど残念ながら廃止されてしまった。ここで1人と合流。残り3人は三鷹と高尾で合流になる。旧形の特急車でとばして三鷹。1名乗車でその後立川。豊田車両センターでは計測車、イースト^{アイ・イー}・Eを、八王子ではタキの車両を見た。8時59分高尾着。スタンプ押して駅舎見て、コンビニでカサ買って。残り2人と合流して10名全員がそろった。



予定より1本遅い小仏行きのバスで10分と少し。大下バス停で下車。ここからいよいよスタート。

バス停から少しもどってJR中央線と道路の交差する所へ。そこから分かれる林道を上っていく。この交差はレンガのアーチになっていた。

またこの先のカーブは中央線の撮影スポットらしく、僕と同じような鉄道ファンが何人かいた。僕もやってきた列車をとったが、失敗。もっとうまくなってからまた来よう。

カーブの先で中央道をくぐり梅園を横に見ながらのゆるやかな上り坂。このあたりで道もアスファルトから砂利にかわる。

しかしここで阿部隊長の植物観察が開始。適度にやるならまだしもこれが遅い！ 5m進んで3分説明。また10m進んで3分、とじわじわしか進まない。バス停から500mでもう20分もたっている。そして説明に興味のない人たちは20mばかり前を行ってこれは説明するだろうと当てるゲームを開発したりした。巨大なおばけゼンマイ(みたいな)のや、幹や枝がみなコケだらけで葉もないのに緑色をしている木などがあつた。



バス停を出て約2時間。ようやく景信山の登山口に到着。本当はここまで約40分のはず…。

沢を渡っていよいよ本格的な登山開始。わき水を過ぎしばらく行くと急な登り。途中で景信まで45分の立て札。もう3分の2は来たと思ったのに…。その後、さらに歩いて午後1時、景信山に到着。45分くらいで出ようと思っていたものの茶屋で買った天ぷらを食べたり、中にはお酒を飲む人もいて大じょうぶかと思った。そんなこんなでたっぷり1時間休んで2時に出発。小仏峠へ。ここからは植物観察も減って比較的速く歩いた。ほぼコースタイムどおりで小仏峠へ。ここはかつて武田信玄が関東の北条をせめたとき別動隊が通った所だそう。それを率いていたのが武田の重臣、小山田信茂。大河ドラマ「真田丸」を見ている人は分かると思う。のちに武田を裏切り織田についたものの信長の長男、信忠に殺された人。

(次ページへ続く)

少し上の展望台から相模湖と渋滞する中央道を見て出発。トイレのため先に行った2人を追いかけた。

またもコースタイム通りで小仏城山着。先に行った2人と合流した。このとき高尾陣馬スランプハイクというものをやっていて景信山に続いてここでも押した。

城山を出発。ここからは過去にも通ったことのある道だ。たしか4年前この先の道がどろどろで大変だった覚えがあったが、その道は整備されてきれいな道になっていた。ここへ来て何人かに体力が落ちている人がいたので助かった。

しかし日もかたむいてきていて帰りのケーブルカーが心配になったので調べたところ6時半までであった。とはいえやっぱりみな疲れているため休憩の頻度を増やした。というか自然にふえた。みんなの体調をきいたあとで出発。最後の200mを階段で上るとそこがやっと山頂。僕をふくめて全員疲れてヨロヨロ。バラバラになって山頂に到着。時間がないので写真をとってさっさと出発。5時を過ぎた高尾山は店も閉まって、人影もまばら。薬王院もシーンと静まり返っていて日没まぎわでうすぐらい山はちょっとぶきみだった。そんな中スタンプハイクのスタンプが置かれていたのはおどろいた。ケーブルカーの高尾山駅に着いたのは5時40分少し前。きっぷを買ってトイレもすませて40分に列車は高尾山駅を出発。すぐに日本一の急勾配*にさしかかり、水平だった座面がななめになり座るのが大変だった。6分ほどで清滝駅着。1軒だけ開いていた店で絵はがきを買った。絵はがきを集めるのも僕の趣味だ。少し歩いて京王の高尾山口駅へ。去年新しくなった駅舎は夕やみの中にライトアップされてきれいだった。



※後で分かったことですがこの勾配は角度が31度18分。281パーミル(1,000m進んで281mのぼる勾配)だそうです。



6時頃高尾山口を出発。1駅目の高尾で下車。1人はそのままっていくためここでお別れ。その後中央特快で新宿へ。途中の中野でまた1人が別れて8人で新宿へ。トイレ待ちの間まわりを見て駅弁屋を発見! すぐ店にかけこみチキン弁当というのを買った。ここでさらに1人が別れて計7人に。予定列車の1本あとの列車で赤羽へ行き乗り換えの時間を使って家に電話。時間がないので短く話して終わり。その後宇都宮行きに乗って途中の車内で駅弁を食べつつ1時間半。宇都宮には9時20分頃に到着。30分待ちのあと9時58分発の日光行き。久しぶりの4両。朝乗ったばかりだけど。鹿沼で6人が降りて1人に。終点日光到着は10時38分。最後の宇都宮行きも出発したホームに降りたのは僕をふくめてわずか6人。ほとんどが迎えの車で帰り僕も迎えにきた家の車で帰った。

後日スタンプハイクに応募した。当たるかなあ。当たるといいなあ!

今回は大変ながらも楽しい登山でした。

かぬま郷土史探検
～春の御殿山・千手山ハイキング～
4月24日（日） 天気・くもり

街なかのサクラはほぼ散りつつが咲き始めた4月後半の日曜日、北小の裏山ともいえる千手山から御殿山近辺を、お城があったという戦国時代に思いをめぐらしながらじっくり見て回りました。北小新任の福田校長先生もご夫妻で参加され、身近にあり昔から馴染んでいたはずなのに初めて知ったことのあれこれに、皆で興奮しながらの半日でした。

（参加者の皆さんから多数報告をいただきました。次頁以降にご紹介します。）



鹿沼城内堀の底にて

※ 参加者

佐々木伸二、稲葉幸枝、西山弓子、福田宜男・明子、石崎隆史・裕子、阿部瑞穂・良司・みゆき（計10名）

※ 鹿沼城探検写真館



北小裏の「御所の森」
かつてはこの裏に池と弁天があったという



巖島神社（上材木町）



坂田稻荷（上材木町）



岩上山を背景にした
宝蔵寺山門のたたずまい



←今宮神社の拝殿
鹿沼出身の陸軍大将
奈良武次の筆になる
「今宮神社」の額
(下円内は拝殿横の彫刻)



御殿山球場の外周→
球場の位置に城の中心があり
外側に土塁や堀が
めぐらされていたらしい



拝殿横面の雨ざらしの彫刻



←岩上山に分け入る
すぐそこまで
住宅地が迫っているなんて



セブン・イレブン上材木町店は、旧城郭の一部を切り開いて建てられた
土塁をスパッと切り取った様子がわかる



御殿山から堀に向かって降りて行く



雄山寺の壬生義雄の墓

※ 参加者からいただいたおたより

かぬま郷土史探検、面白かったです！

へえー、びっくり！がいっぱいあって、とても新鮮でした。どれもこれも知らないことばかりでした。

今宮神社の大ケヤキは、幹が空洞になっていて、倒れたら周囲に危険が及ぶとのことで切り倒されたのだそうです。費用は100万円かかったとか！老木が切り倒されてしまうのはなんとも寂しいことです。何百年もの間、晴れの日も嵐の日も街

の暮らしを見続け、祭りの屋台を見守り、多くの鳥のねぐらになってきたものは、なにか精霊が宿っていそうですね。すっかり見通しの良い空間ができて、今まで木が紡いできた時間はどこに行ってしまったのでしょうか…脱力してしまいます。

鹿沼城の跡、初めて知りました。なんとなく球場の辺りにあったのかな、と漠然と思っていましたが。あのふかふかした足の踏み心地は最高でしたね！自然に放置されているのがよかったように思いました。もっと多くの人に知ってもらいたいような、荒らされるから知ってもらいたくないような…

とにかくありがとうございました。楽しかったです。また、よろしく願います～

(稲葉幸枝)



ふだん、なにげなく見ていた市内を巡っての5時間は、大変有意義なものであった。とくに、次の3ヶ所について感想を述べたい。

① 今宮神社の境内の小高い所に、芭蕉の句碑があったことにびっくりした。大変立派な石に次の句が刻まれていた。

(君やてふ我は莊子の夢心)

堀切実など編の「新芭蕉俳句大成」によれば(君やてふ我は莊子か夢心)となっており、一文字が違っている。1690(元禄3)年に怒誰(どすい、膳所藩士、蕉門のひとり、生没年等未詳)に宛てた書簡にあるそうである。(あなたが蝶か私が莊子か夢を見ているようで判然としない)というような意で、怒誰は芭蕉と同じく莊子の愛読者だったそうである。

② 御殿山球場の城跡はいろいろな碑があっておもしろい。堀を見たり野球をしている様子を見たりしている時、阿部さんが「オオルリが啼いてる」と教えて下さった。耳をすましましたが私には聞えず、高い木の上の方で2羽が飛び交わしているのを見ただけだった。阿部さんが、「オオルリがちょっと寄り道したのかな」とおっしゃっていた。

(次ページへ続く)

大瑠璃や城址の梢ゆらしをり ゆみこ

③ 雄山寺の壬生義雄の墓は、入口から200メートル歩いて深い木々に囲まれてあった。当寺の計らいであろうか新しい塔婆があった。壬生義雄(1545~1590年)の原本書状一通が、たまたま県立博物館で公開されており、さっそく見てきた。書状を見ているうちに、秀吉の時代を生きた義雄が身近な人になったかなと思う。

著莪(ジャガ)の花城主の墓へいざなへり ゆみこ

(西山弓子)

鹿沼城あとめぐり

地元のこって知ってるようで意外と知らないもんですよね。そんな知ってるようで知らない御殿山と千手山、つまり鹿沼城の跡をめぐりました。

北光クラブとしては遅いAM8時に集合。新しいメンバーをふくめて計10人で出発。どちゅうで寄った弁天池で、コイヤカメを見て行きました。昔はここでよく見てたなあ…なんて思いながら次の宝蔵寺へ。ぼくはここはさらっととばします。

次は今宮神社…の前に、ひさびさに幼稚園の先生だった黒川先生と会って立ち話。今宮神社は、御神木が切られたりして変化もありましたが基本は同じ。ここもけっこう知らないところもあって、へえこんなだったんだ! などという発見も。芭蕉の句碑をさがしているとあったのは裏山の中。よし、ここを「今宮山」にしようと思っていたら、すでに名前があった。「鐘楼山」だってさ…残念。

気を取り直して次は…セブン・イレブンの裏山。特別に入れてもらったこの山がぼくの中ではもっともよかったところです。とても巨大な土塁。昔は二重だったというから、「やだなあ、ここをせめるのは…」なんて敵兵の気持ちになって考えてみると面白いものです。休憩のあと本丸にあたる御殿山へ。本丸は今は野球場で、少年野球チームが試合中。持ってきた古地図の写しを見ると本丸より二の丸のほうがよく分かりました。このあと南側にある堀に下り、そこをたどって…雄山寺です。東武線の横にあるやつです。ぼくは電車好きなのでよくここに見にきてたなあ…。壬生義雄のお墓を見たあと時間がなかったのでげんこつ山はパスということになりました。さっきの所で待っていると金色のスペーシアがやってきました。

このあとは千手山へ。久しぶりだな…千手山。前からでっかいみぞがあってなんだろうと思っていました。みなさんおわかりですね? そう、堀です。入ったのは初めてです。お堂の前を通過して北小へ。

今回分かったことは…鹿沼城ってデカいってことです。以上、ありがとうございました。

(日光市立東中学校2年・佐々木伸二)



八重桜が美しい4月最後の日曜日に、かねてからの知り合いの阿部夫妻のお誘いを受けて、鹿沼城めぐりのハイキングに参加させていただきました。

実は私は、上材木町(現在の響茶庵辺り)で生まれて、6歳までをそこで過ごしました。今回訪れた所、全てが感慨深く思い出されました。

私が生まれた昭和39年頃の上材木町界隈は、小さな家々がくっついて建ち並び、いつも人の気配が感じられ、助け合いながら慎ましく生活していたように思います。整備された公園などはありませんでしたが、子ども達はいろいろな年の子どもと一緒に本当によく外で遊んでいました。家の前の道路や小川、坂田稲荷神社の石段、今宮神社の後ろの森が基本的な遊び場でした。時には近くの岩上山(今回初めて名前を知りました!!)や御殿山、お千手山に登ったり、基地を作ったり、勝手にお寺で肝だめしをしたり毎日楽しかった思い出ばかりです。

今回、おそれ多いことにこれら遊び場所が全て鹿沼城跡だと知りました。この歳になって郷土史を学ぶ機会に恵まれましたこと、当時の上材木町の方々がとても寛容で温かく子どもたちを見守ってくれたことに気づき、深い感謝の一日でした。

(福田明子)

活動報告おまけ

カヌマ大学・自然観察学部主催「お千手山の観察会」開催

カヌマ大学を主宰する藤田さんのお子さんたちの希望にお応えする形で企画し、千手山の足元の植物の観察会を開催しました。3月25日(金)午前、春休みに入ったばかりの小学生の親子何組かが集まりました。頭上の桜はまだでしたが、我々の関心はもっぱら地面の上。何種類かのスミレや、春を感じさせる野草の花の数々に、ひと味違ったお花見の思い出を作っていただけかと思います。

カヌマ大学の案内チラシ→

The flyer features the KANUMA University logo at the top, which includes a stylized figure of a person with arms raised. Below the logo, the text reads 'カヌマ大学 自然観察学部 お千手山の観察会'. The event details are listed in a structured format: Date (March 25, 2022), Location (Thousand Hand Mountain), Time (10:00-12:00), Fee (100 yen), and Organizers (Kanuma University and Kenjiro Abe). There are three small photographs showing the natural environment of the mountain. At the bottom, contact information for Kanuma University is provided.

カヌマ大学 自然観察学部
お千手山の観察会

- 日時 平成 28 年 3 月 25 日 (金) 10:00~12:00
- 場所 千手山公園 (千手観音堂の前に集合)
- 持ち物 動きやすい服装、自分の飲み物 など
- 参加費 100 円 (保険料) ※当日現金払いください。
- 定 員 15 名
- 教 授 阿部啓司さん
- 申し込み方法 電話 (090-8894-7988 藤田) にご連絡ください。
- 中学生以上の方は千手山公園の自然観察会の方にご参加ください。

【主 催】カヌマ大学
【問合せ先】藤田 090-8894-7988 (カヌマ大学)

今年度から新しい企画、「野州文献好古」を連載したいと思います。郷土に関する文献を明らかにしていこうという取り組みです。内容は、地図、刷物、登山・旅行案内、紀行、自然誌、文学、歴史（史跡、神社・寺院の出版物を含む）等です。折しも今年には勝道上人が日光山を開山、すなわち766（天平神護2）年に大谷川を渡り、四本竜寺を建ててから1250年に当たります。そこで当面、日光山関係の文献を取り上げ、できればもう1冊、鹿沼、あるいは栃木県各地域に関する文献を同時に、現わしていければと思います。文献としての価値の是非はさておき、とりあえず古きに敬意を表し、面白そうな書物に注目していきたいと思います。それが「好古」とした所以です。

一、奈良仏教と日本三戒壇

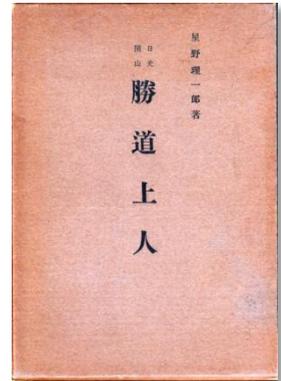
勝道上人は奈良時代の中頃から平安時代の初期にかけての人である。よって、上人の一生を知ろうとするには、一応、奈良時代の仏教を調べて置かなければならない。

奈良時代というのは、第43代の元明天皇后（西暦708年）から第49代の光仁天皇（西暦781年桓武天皇に譲位する）まで7代、約70年間で、都を大和の奈良に置いた時代をいう。

奈良時代は前の飛鳥時代アスカに引続いて、遣唐使や留学生や留学僧がたびたび唐に派遣されたので、大陸文化が盛んに輸入せられ、律令制度による中央集権が確立し、皇威のもっとも隆盛を極めた時代であった。ことに、奈良の都は家屋の作り方などは唐の様式を真似て、今までの草葺板葺の屋根が青や赤の瓦葺に変わり、その他、衣服調度品に至るまで唐風にならって、華麗絢爛目を驚かすものがあつた。

ことに、仏教は朝廷が庶民に先んじて尊信したので非常に栄えた。すでに、第40代の天武天皇は奈良朝の初まる約30年前に詔を下して、家毎に仏像ミコトガを祀らしめ、地方に僧侶を遣して經典を説かしたというほどだから、わが国古來からの神道のなかに、仏教が如何に浸み込んで来たかが解る。かくして、第45代の聖武天皇の時シにいたってその絶頂に達したというる。

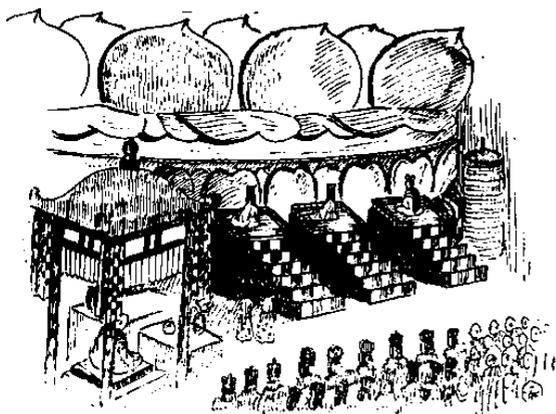
聖武天皇は光明皇后とともに、歴代天皇中もっとも仏教を信じ、仏の功德ホトケによって国を治め、国利民福を増進しようとせられた。そのため、盛んに堂塔を建て、仏像を造り僧徒をして經典を読み説教を行わしめた。そればかりでなく、国毎に国分寺と



国分尼寺を建てて、それぞれの国を治めしめた。それ等の諸経費はほとんど国費でまかなくなったから、仏教は全く国教としての性格を占むるに至った。天皇の発願によって建てられた東大寺は、その結構莊嚴を極め、これを以て全国の総国分寺とした。この本尊である盧遮那仏(大日如来)は、いわゆる奈良の大仏で、今なお、その名が全国にひびいている。天皇は孝謙天皇に位を譲られ上皇となって、天平勝宝四年大仏の開眼供養を行なった。この時上皇は、天皇、皇后、皇太后とともに文武百官を随えて親臨せられ、一万の僧侶これに参列し、その儀式の莊嚴、華麗実に未曾有の国家的盛儀であった。

ところで、勝道上人は聖武天皇の即位後12年、すなわち天平7年に生れている。それで、天皇が詔して盧遮那の大仏を造り初めたのが天平15年であるから、上人9才の時、開眼供養の行なわれたのが18才の時に当る。上人は足一度も下野国を出たことのない人であるから奈良大仏の莊觀は見していない。けれども国分寺や薬師寺で修行中に奈良の話を知り、その知識は持っていたにちがいない。当時行われた宗派は三論、成実、法相、俱舍、華嚴、律で何れも支那から伝えられたものである。これを南都六宗といい、天台、真言のような日本式のものでなかった。それで、当時支那から沢山の僧侶が渡来し、わが仏教界を指導した。なかでも、鑑真和尚はもっとも著名な人で、2、30名の優秀な技術を心得た徒弟を従えて渡来した。これ等徒弟の活躍は、ひとりわが国の仏教文化の発達に寄与したばかりでなく、医薬、建築、工芸、農業などの発展に貢献したことも少なかった。勝道上人はこれ等徒弟の感化をも受けたのであった。

星野理一郎著『日光開山 勝道上人』(昭和29年12月10日発行)より



奈良大仏の開眼供養壇
壇の中央が孝謙天皇(35歳)、
右が天皇の御父聖武上皇(52歳)
左が御母光明皇后(52歳)、晴れ
の式にあつまった僧侶1万人さまざ
まの袈裟、衣で儀式仏教の盛んな有
様がわかる(本書より)

きのこ再び(前編)

きのこのことは月報第7号以来であり、栃木での思い出や一般の人にはあまり知られていないことを紹介したいと思います。



私が鹿沼に異動したのは1998年の8月であり、他に4名いた。みんなイヤがっているのに私だけルンルン気分なので、「喜んでのお前だけだ」と言われた。実のところチタケ(チタケ)(右図)の事情を知りたかったのである。栃木県の人にはチタケが一番人気があるということは本郷次雄先生から聞いていたし、一部の図鑑に載っていて鹿沼へ行く前から知っていたので、これ幸いによるこんでいた。チタケは関西にもあるが、高い山に多いので北方系のキノコだと思う。鹿沼で最初に知り合った同年の女性がチタケソバを作るからおいでと家に誘ってくれた。鹿沼に来て早々、なんてラッキーなことだと思った。この味はナスと油炒めしないと出ないのが不思議だという。たくさん採れた時は冷凍保存するそうだが、1年近くたったものは同じように料理しても、この味が出ないそう。漢字では乳茸で、乳液が新鮮なうちだけのようである。料理店のメニューにちたけそば・うどんというのがあった。この味が忘れられず入った。たしかにちたけそばだが、加工してビン詰めにしたものが上についているおそまつなもので、チタケの旨味が出し汁に出ていないのでガッカリした。なぜビン詰めチタケかという、直売場で売られていたものとまったく同じであったからだ。どこで作ってるんだろうと思って見ると福島県とある。福島人はチタケを食べないと聞いていたので、おどろいたものである。また、大きいスーパーでもちたけが売られていることも同じであろう。知り合った福島県出身の男性は、チタケソバが大好きだという。このほか、ちたけは福島県寄りでは好まれるが、群馬県寄りの人はあまり食べないと言っていた。一つの食文化であり、味の出し方を知らない地域では好まれなように感じた。鹿沼で知り合った、あるきのこ屋さんが、これが最高級のチタケだと言って見せてくれた。それは、チタケよりも暗い色をしていて傘の周辺部に細かいシワがある。これは別種のチリメンチタケであり、区別していないようである。

もう一つは、ハイカグラテングタケ(右頁)である。比較的近年に記載されたきのこであり、図鑑にはテングタケの仲間だから強い毒がある可能性があるから食べないようにと記してある。ところが、先ほどのきのこ屋さんは、福島県や栃木県で食べられているとあって食べさせてくれた。このきのこは茂呂山にも生えたことがある。1本は少しおくらせて生えることもあるが、必ず2本1組で生えるのが不思議なキノコだ。茂呂山

で知り合った田野井さんは、茨城県で傘が開いたハイクラテングタケを1本 4,000 円で売っていたと教えてくれた。それにしても、いつ頃から食べられていたのだろうか。ハイクラテングタケと食用のカラカサタケの幼菌は似ているので間違えて食べられたのが最初ではないかと思う。(2016年3月30日受領)



☞ 新聞から・1 ☜

当クラブ鷺子山ハイキング・鹿沼城探検などに参加された稲葉幸枝さんが本を出され、下野新聞で紹介されました。編集部にも1部ありますので、興味ある方はお問い合わせ下さい。

「昔語り文集」発行／次号に向け体験談募る 鹿沼の稲葉さんら／戦争、貧しい時代…次世代に伝えたい

【鹿沼】千渡、元出版社編集者稲葉幸枝さん(65)が中心となった「昔語り文集」作成委員会は、「子どもたちに伝えたい こんなことがあったよ」と題した文集の第4号を発行した。次代を担う子どもたちに残しておきたい体験談や思いなどをお年寄りらから聞き、まとめている。ただ、戦後70年が経過するなど昔語りのできる人は少なくなっており、稲葉さんは次号に向け「戦争体験や生活の知恵などを話してくれる人を募っている」と呼び掛けている。(枝村敏夫)

文集のきっかけは2012年10月、生涯学習推進サポーター「グラッド」主催の戦争体験語り部講座だった。講演内容や聴講者からの感想文などを編集、13年2月に第1号としてA4判28頁でまとめた。その後、年1回の発行を続けている。

戦後70年が経過、戦争を経験した世代の「語り部」が少なくなる中、若い世代に戦争の愚かさや、貧しかった時の体験を伝え、生の声から「何か」を読み取ってもらおうのが狙いだ。物があふれ豊かになった現在との対比の意味合いもある。これまで市内を中心に96～65歳の約40人から聞き取り、原稿の提供をしてもらった。多くは戦争体験、親から聞いた戦争のこと、戦後の貧窮した時代のことが書かれてある。

第4号は「学徒動員と鹿沼の空襲」「赤道直下での空腹と苦役」など7人の体験談を紹介。資料、写真と稲葉さんが調べた注釈も付いている。

これまでの文集は市内の小中高校、図書館に配布している。稲葉さんは「隣のおじいちゃんなど、知り合い、身近な人の体験談が書いてあることに説得力があると思う。過去のつらい体験を話してくれた人に感謝したいとしている。

同文集作成委員会は、子どもたちにより多くのことを伝えるため、市内を中心に広く体験を話してくれる協力者を求めている。

(下野新聞2016年4月28日)



「昔語り文集」の1冊

☺ 新聞から・2 ☺

鹿沼城探検で俄かに身近な存在となった戦国武将の一人、壬生義雄ののこした古文書が新たに見つかったとのことで、早速県立博物館へ見に出かけてきました。同館では、壬生義雄とも争い、同じく豊臣秀吉に追われた宇都宮氏の後、下野宇都宮の領主を長く務めた戸田氏に関する特別展も開催中でした。大河ドラマの同時代に、私たちの身近でもドラマが展開していたのだなあと思いがふくらむ思いです。

壬生義雄の書状公開へ／戦国下野の状況伝える／3日から県立博物館 秀吉と北条 はざままで腐心…

【宇都宮】戦国時代に鹿沼、壬生城主を務めた壬生義雄(みぶよしかつ) (1545-1590年)の原本書状1通が、市内在住の男性から県立博物館へ寄託された。従来は「新編会津風土記」などの写本しかなかったが、これによって同時代末期の下野の政治状況が正確に把握できる。3日から同館で公開される。

原本書状は縦27センチ、横32・8センチ。1587年10月9日、義雄が南会津地方の武将・長沼氏へ宛てたもので、宇都宮氏と小田原北条氏の対立によって、日光周辺が非常に緊迫している状況を書いている。

義雄は当時、敵対関係にあった宇都宮氏が交通の要衝である倉ヶ崎(日光)に城郭を構えたため軍事的脅威を感じ、服従していた北条氏に伝えたと、早速同氏が軍勢を派遣。「きょう、あす中には利根川を越える見込みで相談があれば、義雄が取り次ぐ」などと記してある。

(2016年5月1日下野新聞)



県立博物館にて新しく公開された
壬生義雄の書状

☺ 鹿沼・こころの風景 ☺



岩上を守りて立つる山門を
祝して咲くる山桜かな
宝蔵寺にて
良司

山書談話室

白坂正治さんからいただいたはがきです。

前略

『月報第42号』嬉しく頂きました。益々充実の誌面、文芸の香気も漂っていますね。阿部様のひく力の賜物であろうと拝察申し上げます。16～17ページの鳥瞰図、ふっと木暮先生の一連の望岳図を思い、学人と岳人が共鳴する広く深い視野を田部先生との魂の交歓とも一時重ね合わせたことでした。(何でもここでもあちらでもどこでもどちらでも??田部先生と結びつけてしまう習性笑って許して下さい) 次月号御予定の合併号はいよいよ再びの田部重治特集でしょうか? 大いに期待し、楽しみにしております。 草々

4月20日

追伸 富山の山案内人志鷹^{みつ}光二郎です*。

※ 前号「山書談話室」に紹介された人名に転載ミスのご指摘です。失礼しました。

(編集人)



編集後記

4、5月合併号がなんとか5月中に発送できると思っていたら、ついにプリンターが音を上げました。現在の印刷は水に弱いのでレーザープリンターにしたい気持ちもあるのですが、現在の印刷の色調の素朴さが捨てられません。くれぐれも水濡れにはご注意のほどを。バックナンバーが必要な時、また2部以上必要な時は、改めてご請求ください。

せつかなので、表紙の本は田部重治特集を続けます。山岳、自然賛美、旅、田部重治の世界に、本会の学ぶべきことは無限に広がっています。特集期間中に白坂氏より「田部重治特集に寄せて」を寄稿いただく予定です。

その他、自然観察の記録、生き物観察の記録、旅の記録、歴史、民俗、文学等ご自由な内容での投稿をお待ちしております。 (阿部良司)

☞ 本号の内容 ☜

特別寄稿	2016年の春に・・・・・・・・・・・・・・・・	2
山行案内・1	新緑の夕日岳ハイキング～鹿沼の最高地点（1526m）をめざして～	3
山行案内・2	日光・中禅寺湖南岸、巨樹探訪の会・・・・・・・・	5
表紙の本	田部重治著『心の行方を追うて』・・・・・・・・	6
活動報告・1	早春の三轟山ハイキング・・・・・・・・	14
活動報告・2	東京・小下沢より景信山・高尾山～早春の草花の観察～	16
活動報告・3	かめま郷土史探検～春の御殿山・千手山ハイキング～	21
活動報告おまけ	カヌマ大学・自然観察学部主催「お千手山の観察会」開催	25
野州文献好古	・・・・・・・・・・・・・・・・	26
山口さんの自然講座	きのご再び（前編）・・・・・・・・	28
新聞から・1	「昔語り文集」発行・・・・・・・・	29
新聞から・2	壬生義雄の書状公開へ・・・・・・・・	30
鹿沼・こころの風景	・・・・・・・・	30
山書談話室	・・・・・・・・	31
編集後記	・・・・・・・・	31

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第43号

2016年5月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

